

ORIENTAL STUDIES TRIPOS Part II

Japanese Studies

---

Wednesday 4 June 2008 09.00 – 12.00

---

**J.13 JAPANESE TEXTS, 2**

*Answer BOTH sections.*

*Write your number **not** your name on the cover sheet of **each** Section booklet.*

**STATIONERY REQUIREMENTS**

*20 Page Answer Book x 1*

*Rough Work Pad*

**You may not start to read the questions  
printed on the subsequent pages of this  
question paper until instructed that you may  
do so by the Invigilator.**

## SECTION A

Translate **ONE** of the following unseen passages into English: [40 marks]

1

権力闘争としての政治

「政治とは何か」という問いにはさまざまな答えがある。ある人は権力闘争だと言ひ、ある人はヴィジョンだと言うだろう。利益の分配だという答えも

ありうるし、人間関係だと言う人もあるだろう。

しかし、現在の日本の政治の核心にあるのは権力闘争である。参議院では過半数を制し、自民党の政治を麻痺させる力を掌握した小沢民主党が、政

権獲得に向けて勝負を挑んでいるという構図である。

一九一七（大正六）年二月、内務大臣の後藤新平は、当時衆議院の過半数（三八一議席中一九七議席）を制していた野党の憲政会を、「不自然なる多数

(continued on next page)

党」と呼び、これを打破しなければならぬ」と述べて、世間の波紋を呼んだ。この憲政会は、一九一五年に大隈重信首相の人氣に乗じて総選挙で大勝した立憲同志会（九五議席から一五三議席へ）その他の与党三党が、一九一六年十月に合同してできたものであった。現在、われわれが衆議院に見出すのは、小泉人氣によつて二〇〇五年に作られた「不自然なる多数」の自民党。他方、参議院に見出すのは、安倍人氣によつて二〇〇七年に成立した「不自然なる多数」の民主党である。参議院の多数は当分変わらないが、衆議院の多数は解散総選挙で変わりうる。政治が権力闘争であれば、民主党が衆議院解散に向けて全力を挙げることが当然だろう。これを自制せよと言つても無理というものである。一九九三年から九四年にかけて、野党となつていた自民党による細川護国閣批判も、かなり乱暴で無責任なものだった。安倍首相は辞任表明の際、小沢代表

と会談して事態を打開したいと考えたが応じてもらえなかったと述べた。しかし、そんなことははじめから不可能だった。小沢民主党の目的は衆議院の解散総選挙であつて、安倍首相の辞任ではなかつたからである。安倍首相が首を差し出しても言うことを聞くはずはない。極論すれば、不人氣な安倍首相が留任して、その自民党と戦うのが一番の希望だっただろう。したがつて、民主党にとつての課題は、いかなる争点で、いかにして解散に追い込むか、である。解散に至る道筋次第では、民主党に対する国民の支持は急速に低下していくだろう。自民党に対する批判が高まるか、民主党に對する不満が募るか、国民の反応は移ろいやすいものである。ただ、忘れてほしくないのは、日本は国際社会の一員であり、世界に對して一定の責任を負っていることであり、また世界と競争していることである。権力闘争に没頭して日本の地位を傷つ

けるようなことは、あつてはならない。

#### 次期総選挙の見通し

この先、どこかの時点で衆議院解散総選挙となるだろう。そこで民主党が過半数ないしそれに近い数を取るような勝利を取れば、民主党が衆参両院を押さえて政権を取り、その限りでは安定した政権ができる。厳密に言えば、民主党は参議院において過半数を持つておらず、社民党などの協力によつて過半数を制しているに過ぎないが、衆議院で勝利すれば、その勢いで参議院での多数も固まり、あるいは強化されるだろう。

しかし自民党の衆議院議員の地盤は、参議院議員よりもはるかに強固である。踏みとどまつて健闘し、過半数に近い勝利を収めるかもしれない。それでも衆議院が自民党、参議院が民主党という構図となつて、いわゆる「ねじれ」ないし「分断政治」は解消されない。

麻痺  
後藤新平  
大隈重信

paralysis  
Gotō Shinpei  
Ōkuma Shigenobu

Kitaoka Shin'ichi, 'Ozawa anpo-kenpō ron to "bundan seiji" no yukue,' (*Chūō Kōron*, December 2007), pp. 90-91.

(TURN OVER)

韓国で最近おこなわれた請求権協定にかんする外交文書の公開を通じて国交正常化にさいし植民地時代の苦難がどのように処理されたか、市民の目は日韓関係の基本にもむけられている。日本と北朝鮮の国交正常化交渉は、拉致問題で足踏みする状況がつづいているが、分断の克服は南北和解と関係改善の努力を通じて本格化しつつある。第二章は、韓国・北朝鮮と日本とのあいだにある歴史問題を考察するが、その核心は、韓国併合までのプロセスをどのように評価するかにある。とくに一〇〇年前の第二次日韓協約(乙巳条約)による韓国の外交権の奪取は、併合への大きな山場であった。竹島(独島)の日本領への編入もこのプロセスの一部であり、間島の帰属など中朝の国境問題も日本の専断で決まった。このプロセスをどう評価するかは、一九六五年の日韓条約の中心問題であったが、解決されず今日なお「生きた歴史」として過去清算の対象となっている。

中国との国交は一九七二年の日中共同声明で正常化された。声明には、日本が「戦争を通じて中国国民に重大な損害をあたえたことについての責任」が明記され、日中の国交の基本になっている。第三章は、中国における日本兵の加害行為についての筆者の私的記憶からはじめているが、中国では長いあいだ政府の記憶政策と民衆の私的記憶のあいだには乖離があった。

アメリカの冷戦政策により「封じ込め」の対象とされた中国は「大躍進」政策、「文化大革命」で自力による復興をはかったが、失敗に終わり経済的後進性が決定的になった。七〇年代の中国は外からの経済協力を期待しアメリカ、日本と国交を正常化した。七〇年代後半からは「四つの現代化」(一

(continued on next page)

般には「近代化」政策を採用し市場原理を取り入れつつ経済成長をはかった。その結果、中国経済は、沿海地区を中心に高度成長を遂げ、現在では貿易、金融、投資などの指標にかなする限り世界有数の経済大国となった。

しかし権威主義的政権のもとでの急速な経済成長は、人治主義と権力の腐敗、社会的格差の増大を生む。中国政府は強権によって民主化運動にのぞむ一方、共産党の独裁体制をなし崩し的に緩和した。最近では私的企業経営者の入党を認めるなど、国民政党内の脱皮をはかっている。党の求心力の低下は多様化した社会への対処を困難にした。「社会主義祖国」に代わり愛国主義教育が目標とされ、中国近代史上最大の出来事であった抗日戦争にスポットがあてられた。二一世紀にはいり中国の「平和台頭」が資源、領土、安全保障などで周辺諸国との摩擦を増大させると、一時、中国政府は歴史政策を転換させ、外交政策全体とのバランスで歴史問題を相対化する兆候をしめした。これを相殺したのは小泉首相の靖国参拝であった。

|      |                               |
|------|-------------------------------|
| 請求権  | right of requesting documents |
| 乙巳条約 | Osshi Treaty                  |
| 乖離   | gap, distance                 |

Arai Shin'ichi, *Rekisho wakai wa kanō ka* (2006), pp. 16-17.

(TURN OVER)

## SECTION B

Translate **BOTH** of the following seen passages into English:

3 Translate into English [30 marks]:

——北朝鮮の核開発をめぐる六カ国協議への影響も大きいだろうか。

岡本 既存の核も含めて北朝鮮の核をすべて解体すべきだという日本の立場は、ただでさえ孤立しつつある。日本の外交担当者たちはよく頑張っており、交渉態度にも非はない。だが、北朝鮮が核兵器を保有するのは仕方ないとし、そのうえで対応を考えようというのが米中韓などの姿勢になりつつあるのではないか。

そこにきて、拉致問題とも共通する日本の倫理的な基盤をアメリカのマスコミが批判している。北朝鮮は状況を注視し、日本に譲歩する必要はないと判断しているだろう。このまま待つていけば日本は孤立すると見ているはずだ。

訪米はチャンスでもある

——四月下旬には安倍首相の就任後初めての訪米が予定されている。

岡本 私が心配しているのは、デモが行われる可能性だ。在米中国・韓国人・韓国系アメリカ人がプラカードを持って集まるだろう。もちろん、アメリカの警備当局はデモ隊を安倍首相に近づけはしない。しかし、その様子はテレビで全米に放映される。そして記者会見でアメリカ人の記者が「ミスター・ブライム・ミニスター、慰安婦問題をどう思うか」「南京に関する映画をどう思うか」と質問するかもしれない。そのとき安倍首相が役人的、技術的な答弁で対応したなら、これはもう勝負がついてしまう。日本の負けだ。安倍首相は昭恵さんと手をつないでタラップを降りるなど、新鮮で健全な家庭のイメージを打ち出せる人だ。そういったアドバンテージを利用して、

若き正義心溢れる発言をすることでしか、追い詰められつつある日本を救う道はない。今の日本を救えるのは首相しかないのだ。

七〇年に西ドイツのブランド首相がワルシャワのユダヤ人虐殺記念碑の前でひざまずき、花を捧げた。その写真が世界に配信され、ドイツに対するイメージを劇的に変えた。私は安倍首相に同じことをしろと言っているのではない。最高権力者の姿勢ひとつで、国家の姿勢が判断されるといふことだ。

だからこそ、今回の訪米はいい機会だと思いたい。一月に安倍首相がブリュッセルで、日本とNATOとの協力について思い切った発言を行ったことは、ヨーロッパに対して非常にいいイメージを作った。今回も問題に正面から向き合った発言をお願いしたい。謝るとか謝らないとかいう次元の話ではなく、安倍首相の人間性がそのままアメリカ国民そして世界に通じるような対応をしてほしいと切に願う。安倍首

(continued on next page)

相も慰安婦たちの痛ましさを容認したわけはないだろう。その思いを率直に出してくれたらいい。

——安倍首相が世界の流れを理解していなかったとしたら心配だが、理解したうえで自分の思想を貫いている可能性もある。これもまた心配ではないか。

岡本 安倍首相の真意は知らない。しかし、仮にそうだとすれば、その思いは首相である間はしまっていてほしい。他の閣僚がどう発言しようと、たとえ官房長官の発言であろうと、それは国家の最終発言ではない。なぜなら上位者である首相が修正することができるからだ。しかし、首相の発言だけはそのまま「国家の発言」になる。首相個人の思いは尊重するが、首相も国の機関であり、イメージ上では、たった一人で国家を形成する特異な機関だ。だから、世界の潮流に反する発言には慎重たるべきだ。

Okamoto Yukio, 'Shushō no "kotoba" shika kono kyūchi wa sukuenai' (*Chūō Kōron*, May, 2007), pp. 138-9

(TURN OVER

4 Translate into English [30 marks]:

警察の調べでは、金庫が開けられており、中身が空になっていたほか、整理ダンスや机の引き出しがごとごとく開けられるなど、物色された跡があった。道江らの証言では、金庫には常時、数千万円の現金のほか、ブランドものの時計、高価なダイヤのネックレスや指輪などの貴金属類が多数入っていたが、それらはすべて消えていた。

警視庁は捜査本部を設置し本格的な捜査に乗り出した。物取りの線とみて、岩崎の生活や経済状態などの事情をよく知った者の犯行との見方を固めて捜査を進めたが、岩崎ビルに出入りしている業者や岩崎から金を借りたことがある者、さらに知人らを当たっても、それらしい不審な人物は出てこなかった。

しかし、周辺の聞き込み捜査で、犯行時間と見られる午前2時ごろ、

「大きな黒いカバンを持って、

あわてた様子で岩崎ビルから走って出てくる男ら数人を目撃した」

と近くの牛井屋の店員が証言した。このうちの1人が、この牛井屋に何度も食事に来たことがある若い中国人、林海防（仮名Ⅱ28）で、店員は「よく覚えていた」と話している。

林は20歳のときに、中国東北部の吉林省から日本に出てきて、専門学校でデザインを学んでいたが、アルバイトした金では学費が払えなくなり退学。滞在ビザの期限も切れたことから、やはり同じ吉林省の先輩格で、歌舞伎町で中国黒社会（マフィア）の兄貴分として顔を利かせていた李勝利（同Ⅱ35）を頼り、李の組織で使い走りをしていた。このため、捜査本部では林を

含めた中国マフィアが犯行に関わったとの確信を得た。

浮上した情報源は被害者の「元近隣」運送業者

捜査本部では、林の背後に中国マフィアがついていることから、下手に動けば大きな騒ぎになりかねないことと、警察が身辺を探っているとの気配を察知して犯人が高飛びするのを恐れて慎重に捜査を進め、林と岩崎の接点を洗ったが、岩崎は生前、林や李ら中国人グループとはまったく面識がないことが分かった。

これについて道江は、「岩崎さんは日中戦争当時、徴兵されて中国大陸を転々としていたと言っていました。そのときの嫌な思い出があるのか、中

(continued on next page)



中国人を毛嫌いしていて、『中国人には絶対に金を貸してはだめだ』とも言っていたくらいです』と語っている。

しかし、牛井屋の店員のほか複数の線から、林が中国人らしき不審な人物が犯行時間に周辺で目撃されていたことや、事件後、林が毎晩のように高級クラブを飲み歩いているなどの情報を得たことから、捜査本部は、ま

ず林の身柄拘束に踏み切った。林は当初、犯行を否定していたが、部屋から数百万円もの札束が出てきた。さらに、犯行当日の目撃証言が得られていることなどを告げると、観念したように、『私がやりました』と白状した。しかし、他の共犯メンバーについて、林は『知らない』として、頑として口を割らなかった。

捜査本部は、林がどのようにして、接点が多つたかという点に絞って取り調べを進めた。情報源から共犯者もおのずと炙り出されてくると踏んだからだ。

岩崎が高利貸を手広く営んでいることは、少しでも新宿の裏社会を知る人間にとっては常識だが、家政婦が土日以外、毎日

出勤してくること、岩崎が1人暮らしであること、さらに何といても、岩崎がその年の夏に自分のビルの最上階を改装して住んでいること、その金庫に常時数千万円もの現金が保管されていることなどは、よほど親しい人物でなければ知り得ない。ところが、捜査本部が林の住むアパートを家宅捜索すると、岩崎や岩崎ビルの写真のほか、岩崎の大まかな一日の生活時間表、1人暮らしであること、よく立ち寄るレストランやバー、さらにコンビニの名前、岩崎が住んでいたビル5階の手書きの見取り図などが見つかったのである。

林を厳しく問いつめると、ついに観念して白状した。

「情報は、知り合いの中国人の舎弟から10万で買った」

この「舎弟」は、都内の運送会社「黒龍運送(仮名)」の運転手をしている陳文傑(同125)と分かった。

Yuan Xiangming, 'Mushibamu, Chūgoku kuroshakai Nihon senryō,' (*Sapio*, Feb. 13, 2008), p. 42.

END OF PAPER